

ひがしひろしま 郷土史研究会ニュース

No.591

2023年11月

10月例会報告

10月例会は、10月28日(土)午後1時半から市役所北館市民協働センターで開催され、26名が参加した。例会発表は吉田泰義氏により「400年後に明らかになった毛利家の秘密 周姫～二の丸様の生涯」というテーマで行われた。

話の主役は、毛利元就の孫で、3代目の当主であった輝元の側室「二の丸」。幼少期は周姫と呼ばれていた。周姫は竹仁村(現福富町)で児玉元良の長女として生まれた。輝元に見初められ、側室の誘いを受けるが、父が拒み、徳山の杉元宣に嫁いだ。

諦めきれない輝元は、夫の留守中、家臣や周姫の乳母を使って周姫を拉致し、側室になる事を迫る。それでも周姫が拒んだため、児玉家は改易となり、連れ戻そうとした夫は殺された。

ついに諦めて側室となった周姫は正室の嫉妬で郡山城には入れず、本丸完成前の広島城二の丸で生活することになり、「二の丸様」と呼ばれるようになった。ほどなく懐妊した二の丸を長門国小野村に連行し、出産させるも、世話をしていた財満氏に「男子なら殺せ」と命じていた。

この時生まれたのがのちの長門国初代藩主毛利秀就である。財満氏の計らいで殺されることはなかったが、二の丸の出産に関しては毛利家文書には記されておらず、財満家文書が明るみに出るまで400年明かされることはなかった。発表では紙芝居も用いながら紹介された。

<10月例会参加者(敬称略)>

蔵楽知昭、蔵楽恭子、三嶋昇、重竹訓江、中川平介、光田清志、福村博士、國松宏史、吉田泰義、近藤英治、赤木達男、菅野晃行、角谷勉、吉原澄子、西本嘉住、川口裕子、神本良彦、森沢光男、藤原美春、宍戸元文、山地悦子、丸本富美子、吉村鈴枝、進藤真由美、大森美寿枝、間瀬忍(26名)

8月例会発表

「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」 (国重要文化財)について

東広島市教育委員会生涯学習部文化課
石垣 敏之

「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」が、令和

5年6月27日付けで官報告示され、重要文化財に指定された。美術工芸品：考古資料としては当市初、県内で5例目となる。

国の重要文化財。なんと誇らしい響きでしょうか。

それと同時に、適切に管理・保管して、公開・活用する責任の重さに身の引き締まる(身震いする)思いである。

国分寺の創建

国分寺は、古代日本における国家プロジェクトであり、律令国家の宗教的な基盤である。



主要な出土品

天平13年いわゆる「国分寺建立の詔」が発せられた。これは、詔の本文と3か条の条例、5か条の願文で構成される。七重塔の建立、金光明最勝王経と法華経各10部ずつの書写、聖武天皇自ら金字金光明最勝王経を写して塔ごとに納めること、その七重塔を持つ寺(国分寺)を「国の華」として長く久しく保つために「好処」を選定することを命じ、国師は国分寺を荘厳に飾って清潔に保たなければならないとしている。

また、僧寺(国分僧寺)は「金光明四天王護

11月例会のご案内

福山市での県史協大会が開催されるため、11月の例会はありません。

国寺」、尼寺（国分尼寺）は法華滅罪寺とすること、僧の人数や封戸のことが記されている。

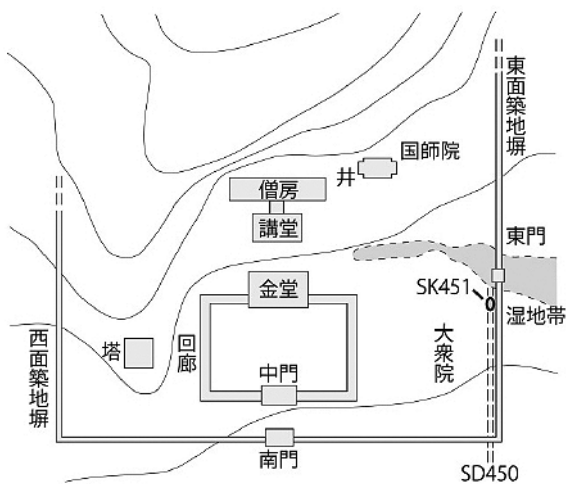
安芸国分寺（僧寺）は南向きの緩斜面に位置し、周辺には弥生時代の集落跡が多数存在するほか、前身寺院があったとされるなど「好处」と言えよう。

ちなみに、尼寺は明確な遺構が確認されていないため、場所の特定はできていない。

「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」の概要

さて、今回の話題の中心である土坑出土品について整理しておこう。

出土品は、「451号土坑」と呼ばれる穴から見つかった。土坑とは、「人が意図的に掘った穴」のことで、この451号土坑は、見つかった場所や内容などから“ゴミ捨て穴”と考えるのが妥当であろう。



主要な遺構配置と451号土坑の位置

◎出土品が見つかった451号土坑の概要

- ・南北に長い台形状（長さ約9m、幅は北側が約5m、南側が約3.5m、深さは約0.8m）を呈する大型の土坑である。
- ・安芸国分寺の寺域を区画する東側の築地塀の内側で、東門に近い位置。
- ・この土坑は、ゴミ捨て穴と考えられることから寺域の中心部を避けるように、東端に穴を掘ってゴミを捨てたと考えられる。
- ・土坑の南西部一帯は、寺の維持管理などを担う「大衆院」が想定されている。
- ・土坑のあった一帯は地下水が湧き出している区域で、湿地面が広がっていたことにより、木簡をはじめとする木製品などの有機質の遺物も遺存していた。

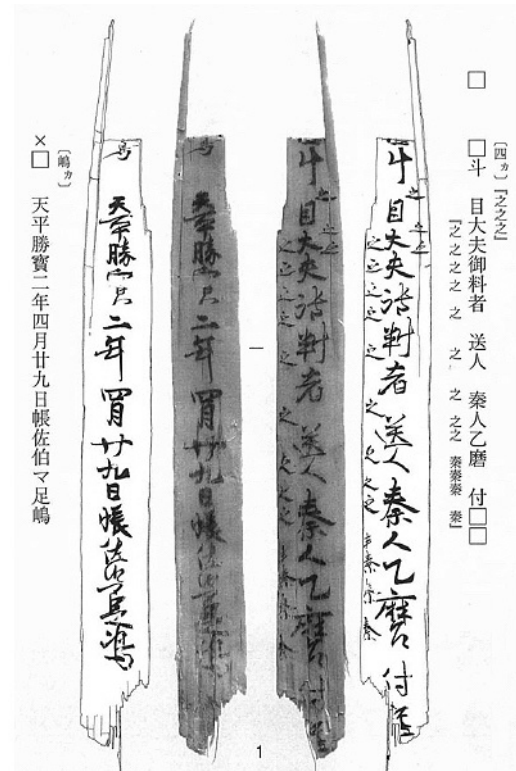
◎451号土坑からの出土状況

- ・遺物は、土坑の下層に広がる木屑層から出土した。
- ・土坑が埋まって廃棄された後、その上部には排水対策として設けられたと考えられる溝（SD450）が掘られている。
- ・溝（SD450）から出土した土器により、その溝は土坑が廃棄された直後の8世紀後半に掘られ、その後9世紀前半までは流水があったと考えられる。
- ・上記の理由から、土坑は溝より古く、8世紀後半以前に埋没したと考えられる。

◎土坑出土品の内容

主な出土品について

- ・木簡及び木製品：木簡には「天平勝宝2年（750）」の紀年銘を持つ大型のものや、「佐伯郡」「山方郡」「高宮郡」など古代の安芸国内の郡名と“米”“鋪設”“薦”“簀”などの品物名が記されたもの（＝荷札か）、題箋軸・檜扇・杓子の他、角筆や籌といった珍しい資料も出土している。



「天平勝宝2年」紀年銘木簡

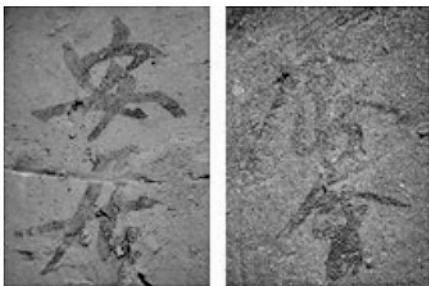
- ・須恵器と墨書土器、その他の土器：供膳具である須恵器の皿と蓋杯類を中心とし、少量の土師器が伴う。その中でも仏教行事である「安居」「齋会」、寺院を想起させる「寺前」「佛」「像」、僧侶の名前と考えられる「勝千」「嚴及」などが墨書されたものが注目される。また、焼塩土器が多量に出土していることも注目されるが、これは齋会などの調味料で

あるとともに、仏法僧への供養品であったと考えられる。

- 植物遺存体：ウメ・モモ・スモモの核、サンショウやイヌザンショウの実など23種類以上の植物遺存体が見つかることは、仏教行事で利用された食用植物を考える貴重な資料である。

◎「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」の学術的価値

- 1) 考古学的観点から、土坑の時期が極めて限定（8世紀第3四半期）される
- 2) 「安居・齋会」などの墨書土器⇒仏教行事⇒施設が必要



「安居」「齋会」の墨書

- 3) 「天平勝寶2年」銘木簡の出土⇒実年代が判明 ※国分寺建立の詔から9年後⇒創建後間もない国分寺で「安居・齋会」など仏教行事を執り行っていた⇒少なくとも天平勝寶2年（750）には、主要な伽藍（金堂など）が完成していたと考えられる⇒これまで不明だった国分寺の建立時期が推測されることとなった
- 4) 郡名や宗教行事名の記された木簡・墨書土器・各種木製品⇒安芸国内の各地からさまざまな品物が送られたことを示す
- 5) 「籌」や「角筆」などの（考古資料として）初見資料の確認
- 6) 仏教行事に関する道具の組成が復元できる
- 7) これらすべてが一括で（まとめて）出土し、且つ時期が特定できる

「広島県安芸国分寺跡土坑出土品」の意義と今後の課題

これまで、全国の国分寺の発掘調査や文献資料の調査でも、国分寺の創建時期について具体的には分からなかった。文献史学では、年代が古いほど文字資料が少ないため検証に限界があり、考古学では、資料の蓄積は進んでいるが「いっどこでだれが」という疑問には曖昧な答えしか出せないジレンマがある。

木簡や須恵器は考古資料であるが、そこに書かれた文字は文献資料である。今回は、それぞれの弱点を奇跡的に補い合い、我が国の歴史を復元する上で、貴重な一石を投じたことになったのである。

私たちは、この学術的価値が高い資料を確実に未来へ伝えていくため、定期的なメンテナンスをしてベストな状態を保って行く必要がある。

また、常に調査研究を進めてより理解を深めるとともに、展示や各種講座などの普及活動をととして一人でも多くの方にその存在を知っていただかなければならない。

その使命を託された者の一人として、肝に銘じる次第である。

451号土坑の出土品についてもっと詳しく知りたい方に報告書を公開しています。

<https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/soshiki/kyoikuinkaishogaigakushu/3/4/33931.html>

第52回郷土史展を終えて

～高屋町小谷地区の歩み～

実行委員長 三嶋 昇

令和5年度の郷土史展は、「高屋町小谷地区の歩み—古代・中世・近世を経て、現在に至る歩みを辿る」というテーマで、9月20日（水）～9月25日（月）までの6日間、東広島市芸術文化ホール「くらら」の市民ギャラリーで開催し、682名の入場者がありました。

高屋町小谷地区は、6世紀後半以降の古墳や遺跡が確認されており、古代から人々が生活を営んできた歴史のある地域です。

内容的には、4月に開催した「東広島の史跡・文化財を見て歩く会」を基本として、中味をグレードアップして地域のことを知ってもらいたいと考えていました。よって、展示企画において“小谷焼”の実物と、小谷八幡神社に奉納されている“絵馬”をお借りして展示することで、展示会としての箔がついたように思います。

チラシの構想案と展示品のイメージを立案して、7月末に第1回目の実行委員会に臨みました。メンバーは、歩く会で資料を作っていた方々です。当然の如く注文が発せられながらも、担当していただくところが決まったので、一安心しました。

小谷焼の展示については、歩く会の時に所有者との話がついていたので安心でした。もう一つ、小谷八幡神社の絵馬の借用について、総代会会長の加栗さんをお願いに行き、快諾をいた

いただきました。

開催当日は、直後から入場者が続きました。さらに、加栗さんが来られて絵馬を見て開口一番「こんな立派に展示してもらいありがとう」との言葉をいただきました。これは、今田さんのお陰です。

入口のショーケースには、小谷焼と絵馬を展示する。大半の方は、右側に展示している小谷焼（実物）を見てから、会の活動写真を見ながら進んでくる。この時に記念品と作品目録を渡していた。

鮮明な色彩の絵馬には、感動する方が多かったです。入口のショーケースに展示されているものを見て、入って来る方が多い。

吉田さんが作成した山城コーナーでは、イメージ図を見て「こんなものが小谷にもあったのですか？」と問う女性もいた。小さな地域に6つもの山城があったことに驚いている方が多かったです。山城を示した地図を見て、「今度行ってみよう」と持ち帰った人もいた。

蔵楽（恭）さんが作成した小谷八幡神社の資料で、神社が620年前に創建されたことを知った方から、「すごい」という言葉が続出であった。頂上の広場で走る馬を見たという年配の方が数名いた。

今回、注目を集めた絵馬の展示は、加栗さんと今田さんのご尽力により実現した。お借りしたのは全16枚のうち3枚で、拝殿から外されたのは初めてという事でした。残りの13枚の絵馬について写真を掲示して、全16枚の絵馬を紹介する事ができました。絵馬を見て、江戸時代末期のものは、何が描かれているのか分からない。でも、これがよいという感想をいう方もいました。

小谷焼コーナーは、天野さんの力作を掲示した。歴史に始まり、製造方法、特徴など分かり易かった。元会員の東さんに提供いただいた、写真のように精密な絵も合わせて、当時の様子を詳細に伝えていた。

小谷焼をお借りした前垣さんは、絵馬（実物）をじっくり見て「自分の祖父の名前を見つけた」とのことで、とても喜んでいました。

また、実際に使用している実物を持参してきて、並べて見比べていた方もいた。「本物かどうかは分かりません」としか言えなかった。小谷焼を展示するという事は、インパクトがあったようである。

丸本さんが作成した白市駅コーナーでは、なぜ白市駅になったのかというクイズを出題していた。その答えを地元の方は殆ど知っている。

それだけでなく、自分が子どもの時に聞いた理由も話してくれた。金額は3,000円出したとか、牛馬市の中央を通るようになっていたとか様々であった。また、子どもはクイズで考え込んでいた姿も見せていた。

大森さんが作成した六地藏コーナーでは、私が応対した中で一番質問が多かった。それは、「大原の六地藏はどこにあるのか？」というものだった。「50年以上も住んでいて、あちこち散歩をしているが見たことはなかった」という声もあった。

同じく、大森さんが資料を作成した元浄寺は、近くを散歩する方は多いが、中に入ってお参りする人は少ないようで、今回は勉強になったという感想をいただいた。

蔵楽（恭）さんが作成した“猿田長者”の話は、殆ど知らない方ばかりであった。

景観としては、金明竹の群生地と千代の滝である。どちらも見たことがないという方が多かったです。存在を知って、来春は訪れる方が増えるかもしれない。

咲楽（さくら）夢ロードを流れている入野川。「滝はどこにあるのか？」との質問も多かったです。丸本さんの絵とともに、写真で説明すると、「あれが滝か」と言う声も出てくる。以前はレストランがあり「おいしかった」と感想を言う方もいた。1枚の絵で会話は広がっていくものである。

地域の活動を紹介するコーナーでは、“かるた”を始め地域行事のプログラムや加栗さんが編集された冊子などを展示した。

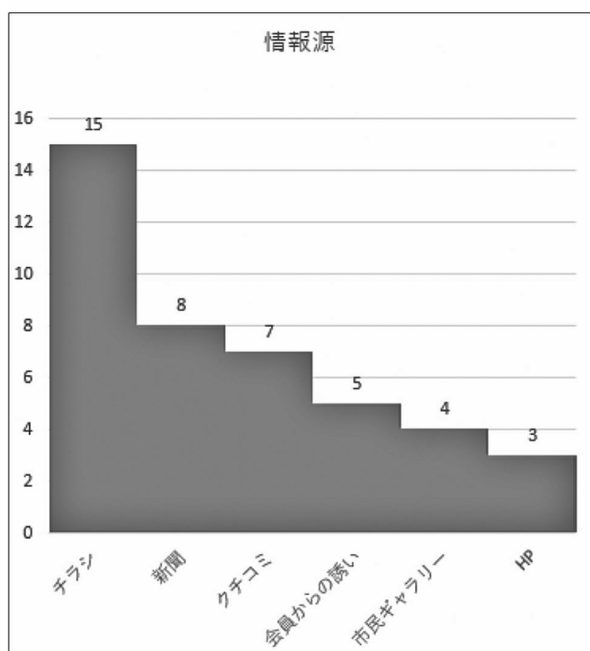
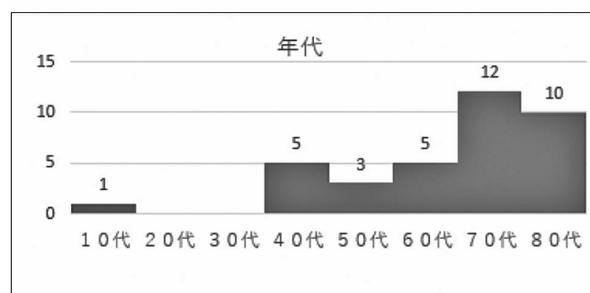
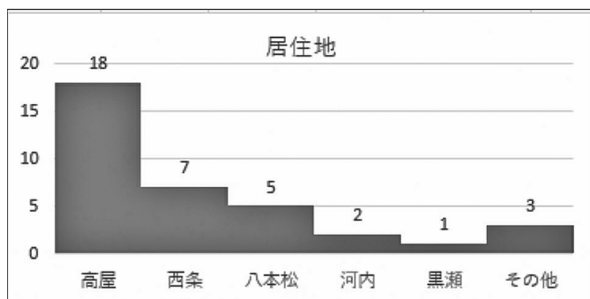
また丸本さんに描いてもらった“旧小谷村役場”は、「すばらしい」の声が続出である。田万里との境付近にあったことを知っている方もいた。「こんな感じだったのか」と感心していた。「現在の福寿会館です」と伝えると驚く方もいた。

今回の展示で、地域の方々が守って来た絵馬や受け継いでいる行事や物を紹介することで、高屋町小谷という地域のことを知ってもらえたと信じている。実物ならではの存在感を感じとってくれたことだろう。小谷在住の方々が、散歩をする楽しみが増えたと言ってくれたことが一番嬉しい。説明してもらってありがとうと言って会場を後にしてくれたことに満足するばかりだ。

今回は、多くの方と接することが出来た。近所の方や知人がやってくると緊張することもあった。さらには、「チラシに、あんたの名前が載っていたので、何をしているのか見たかった」と

団地内の方が相当数来てくれた。これは、西高屋駅周辺から私が住んでいる団地内に一軒ずつ、2,000枚以上配布したことも影響していると思われる。

最後に、今回の展示を成功に導いてくださった方々にお礼申し上げます。迫力のある絵馬の展示を許可してくれた加栗さん、小谷焼を公開してくれた前垣さん、地元へのPRに尽力してくれた小谷地域センターの鈴木センター長、何度も現地に足を運んで、今までにない膨大な資料を作成し、入場者の方々に感動を与えてくれた資料班の方々、開催期間中に当番として、受付あるいは説明に携わってくれた会員の方々、ご協力を深く感謝いたします。ありがとうございました。



9月臨地研修

「みよし古墳めぐり」～午前の部～

大森 美寿枝

日 時：令和5年9月30日(土)

鏡山第二駐車場 8時30分発

集合場所：西条・鏡山第二駐車場、市役所横バス停、JA会館造賀

参加費用：1,000円（各自昼食・飲み物持参）

参加者：29名

場 所：三次市・三次風土記の丘周辺

コ ー ス：①三次風土記の丘→②矢谷古墳→③照林坊→④史跡寺町廃寺跡→各集合場所で解散

三次盆地は県内で最も広い盆地で中国地方最大の川、江の川は三次で複数の河川（可愛川・馬洗川・西城川・神野瀬川）が合流して中国山地を横切り島根県江津で日本海へとそそぎます。江の川は流れが緩やかなこともあり、日本海側と瀬戸内海側を結ぶ交通、交易の動脈が形成されていたと推察されています。複数の川が合流する三次は周辺地域との人や物の交流が盛んに行われていた重要な拠点であったことが県内No.1の数の古墳が（広島県・約11,000基全国6位、三次市は約3分の1の4,000基余り、東広島市内は約700基）物語っています。この度の臨地では三次の多種多様な文化、歴史が詰まった民族資料館の展示と丘陵の古墳群を、「みよし風土記の丘」の学芸員平川氏による丁寧な説明で案内をしていただき、古墳文化の理解を深めていただく機会になったのでは思っております。



みよし風土記の丘玄関前

【コース】

予定通り鏡山公園第二駐車場を、心配をしていた天気も爽やかな秋空となり8時30分に出発、この度の臨地は会の高齢化も考慮して「東広島市社会福祉協議会」のマイクロバスを利用させていただきました。参加者29名で補助席を使用

しないで22名が乗車、7名はJA会館造賀駐車場から乗用車2台に分乗して出発しました。ほぼ予定通り10時前にみよし風土記の丘に到着、昼食会場に予定している「つどいの家」は机、椅子をすでに用意して下さり感謝です。この場所を借りて、赤木会長の開会の挨拶と簡単な当日の予定の説明を済ませ、かねてより依頼をしていた学芸員の平川氏の案内で資料館の丁寧な説明を受けました。

①《広島県立みよし風土記の丘及び

広島県立歴史民俗資料館》

昭和54年4月に開園・開館、風土記の丘は約30haの敷地に点在する176基の古墳からなり、史跡「浄土寺・七ツ塚古墳群」を中心に県北各地から移築した石室、遺構、重要文化財「旧真野家住宅」などがあります。

資料館（みよし風土記の丘ミュージアム）は県内各地から出土した考古資料を年代順に展示してあります。まず資料館の入口を進むとガイダンスコーナーに広島県の地形を表わしたジオラマが設置してあり、三次盆地が江の川により瀬戸内海側と日本海側の接点として周辺地域との交流の地で多くの遺跡が存在している点について説明を受け、年代順に「旧石器時代」からのコーナーに入り、そこは旧石器時代の道具が多く展示してあり、その中の一つでナイフ形石器は切れ味の良い石で出来ており、動物の肉を切ったりするとき使用したと考えられ、刺身でも作れるとの説明に石の陳列に見入ってしまいました。石器を作るのに広く使われた石には「黒曜石」「安山岩」があり、遠くから運ばれてきたものもあり、「黒曜石」は主に隠岐の島で採れ、「安山岩」は冠山や香川県の五色台からなどで当時の人や物の交流の様子が伺われます。



みよし風土記の丘資料館ジオラマ

縄文、弥生時代と進みます。広島県北東部の帝釈峡遺跡から見つかった当時使われていた縄文時代特有の縄目模様の土器が多く展示され、一万年以上前のころから人々の自然と合わせた

暮らしを想像できるコーナーです。

弥生時代になると稲作が本格的に始まり、米作りに関わる道具が多く発見されています。毎日の暮らしで使われたであろう土器にはそれぞれ溝を何条もめぐらせたり、幾何学的な刻み目文様を入れたりして土器を飾っています。

三次盆地周辺で作られた「塩町式土器」には隣接する地域の影響を受けた複雑な文様、洗練された形に日本人の美的感覚のルーツを見たようでした。

弥生時代にはまた、青銅や鉄が中国大陸や朝鮮半島からもたらされ、銅鐸、銅剣、腕輪等の青銅器は祭器や権威を示すものとして使用されていたようです。

弥生時代鉄器は銅よりも硬く鋭いことから武器としての刀、槍など、農具の鋤先、鎌などが展示されています。当時鉄は輸入することしか手に入らない貴重品なため、多くの鉄器を所持していることは権威を示すことにつながったようです。

弥生時代後半になると近隣地域を束ねる首長が現れ、穴を掘っただけの簡素な一般人の墓と区別した、土を盛り上げた特別な墓（弥生墳丘墓）が造られるようになりました。その墳丘墓で発見された館内の展示品のなかでも最大と思われる土器が、堂々とガラスケースの中に展示されていました。

それは「矢谷墳丘墓出土品」で三次工業団地造成に伴う発掘調査で発見されたもので、国指定重要文化財に平成6年に指定されています。高さ99.5cm、口径47.5cmの大きな特殊器台で渦巻文様が描かれ、巴形や三角形の透かしが開けられており、底は抜けているので特別な儀式の道具と考えられています。特殊器台、特殊壺は弥生時代から古墳時代に変わる時期、よく似た土器が出雲地域、吉備地域で見つかっており、両方面と交流していたことがわかります。また、この器台は古墳時代の円筒埴輪の起源と言われています。

墳丘墓から出土した小さなガラス玉3個、鉄製ヤリガンナ、鉄製刀子（小刀）等が展示してあり、シルクロードを経た小さなガラス玉（ローマ帝国産の可能性が高い）に当時の交流網の広さに驚きです。

古墳時代に入ると渡来人（朝鮮半島）から多



風土記の丘の特殊器台

く品の品々や新たな技術がもたらされ、古墳からは豪華な副葬品で埋葬されていたものが出土しており、鏡、アクセサリ、武具と権力を示すと考えられるものが多く展示してあり、加工の技術に感心しています。また、渡来人が伝えた技術で焼き物（須恵器）があります。

灰色の焼き物で、穴窯で1,000度以上の高温で焼くことにより丈夫な器ができるようになり、動物の形をした瓶など多様な形の須恵器がところせましと並んでいました。次に飛鳥・奈良・平安時代のコーナーに進みます。

国の制度が整えられ、都と各国が道路で結ばれ、役所や寺院が設けられました。跡地から発見された硯の一種の円面硯（えんめんけん）が展示してあり、現在の硯とは形がかなり違って丸い形で回りに窪みを作り、高さもあり、当時の文字を書く仕事をしていた人の息使いを感じます。

古代寺院から出土した軒丸瓦は文様の移り変わりが見られ、県内で最も古いと思われる三原市にある「横見廃寺」の忍冬文・火炎文は奈良の法隆寺と同じ文様で同時期に建てられたと考えられます。午後から見学予定の国の史跡「寺町廃寺跡」から出土した軒丸瓦（蓮華文）が多く展示してあり、広大な寺院であったことが伺えます。ちなみに安芸国分寺跡からも蓮華文軒丸瓦が出土しています。

平川氏の館内での説明が解りやすく、楽しくて時間が経つのも忘れるほどでしたが、午後の予定もあり急いで次の「風土記の丘」コースへと進みました。

ここでは「古墳さんさくコース・45分」を選びました。県北から移築・復元された古墳の横穴式石室、竪穴式石室を見ながら進みます。緩やかな坂道を登ると国重要文化財「旧真野家住宅」があり、江戸時代の初め頃（17世紀中頃）の建物で中国山地を代表する農家の古民家です。昭和53年（1978）世羅町にあったものを解体し、移築・復元し保存してあります。昭和55年（1980）に国の重要文化財に指定されました。入母屋造り・茅葺き、間取りは土間の上手に4室を置いた四間取り、12cmも厚さがある鴨居、オキマ（おもて）からナンドへの入口の柱に納戸構え（敷居をまたぐ装置）の痕跡があり、土間のまわりなどには柱が建っていた痕跡もある等大きな農家の建物でした。

また、真野家は元武士であったとのこと。丘の中腹に移築された真野家住宅からきれいに整備されている公園内の芝生をながめ、少しの休憩ができました。

体力を整えて次に進みます。緩やかな坂道の右手には気持ちの良い木々が立ち並ぶ道、地図には自然野草園と載っている側の道を通り、円墳があちこちに点在している七ツ塚古墳群にできました。ここには60基もの古墳が点在しているそうです。円墳が55基、方墳2基、帆立貝形古墳2基、唯一の前方後円墳1基で、なかでも第15号の円墳は直径28.5mで、七ツ塚古墳群の中では最大で、周りの良く見える最も良い場所に造られているようです。

近くには帆立貝形古墳も並んでいます。又少し下った場所に斜面を利用して前方後円墳が造られていました。学芸員平川氏が斜面を利用することで下から眺めると大きく立派に見えるので、そこを考慮して造られたのではと説明をされ、実際に下から眺めると全長約30mの古墳はまさしく立派に見え、権力が誇示されているようでした。

前方後円墳の見学を終え、折り返しの道は遊歩道はずれ気持ちの良い芝生の中を進み、古墳時代の住居を復元している場所にでました。竪穴住居、平床住居、高床倉庫が復元しているのを見て丘を下りようやく出発地点に帰りました。

予定通りの時間に説明を終えて下さり、さすがベテランの学芸員の方だと思い感服です。約2時間余りの短コースを解りやすく、ユーモアを混ぜての説明で一同、楽しく見学ができ感謝です。そこで、思い出に全員で資料館の玄関前で記念撮影、カメラマンは郷土史研究会若手のホープ進藤さんです。

撮影を終え昼食会場にと用意をしていただいた風土記の丘「つどいの家」でランチタイムです。（つづく）

来て！見て！知って！

私の町にある歴史の跡

Vol. 1

「武則一水像」

間瀬 忍

いつも車で通る旧国道375号線沿いに銅像が建っています。銅像があるのは知っていましたが、初代東広島市長のものだと知ったのは、偶然近くを歩いて通りかかった時でした。

今回初めて正面に立ってみました。雑草で荒れて残念な状態。刻まれた文字を読むと昭和59年に第2代市長讃岐照夫氏を中心に建てられ

たようで、台座の文字も讃岐市長のものでした。武則氏が御菌宇出身という事でこの場に建てられたのでしょう。

市政施行50年を迎えようとしている今、当時の様子を知る人も少なくなっています。改めて、歴代市長の功績を調べてみたくまりました。



【所在地】
西条町御菌宇

【建立年】
昭和59年7月

【主な功績】
広島大学の誘致に
尽力した。



《《新規会員募集中！》》

活動の様子がお知りになりたい方は
QRコードを読み取ってのぞいて見てね。
郷土史研究会ニュースもあるよ！



HP



Instagram



Facebook

第38回東広島市の史跡文化財を見て歩く会 実行委員会開催のお知らせ

来年度に向けて実行委員会を開催いたします。毎年恒例の行事ですが、来年度は50周年記念行事と重なり、いつもより多くの協力が必要です。ぜひ参加をお願いいたします。

と き 2023年11月25日(土)10:00～
と ころ 市役所北館 市民協働センター
対 象 全会員

グループ研究会ご案内

第280回 古文書研究会

と き 11月21日(火) 13:30～
と ころ 市役所北館 市民協働センター
テキスト 「村の事件 (其の壱) ③」

第179回 石造物研究会

と き 11月28日(火) 13:30～
と ころ 市役所北館 市民協働センター
内 容 第2回石造物探訪会資料検討

第180回 四日市町並研究会

と き 11月13日(月) 13:30～
と ころ 歴史広場 吟古館
「酒都西條」編集作業

第68回 山城探訪会

と き 11月18日(土) 9:00～15:00
と ころ 鏡山公園第2駐車場及び
木谷地域センター
探訪場所 安芸津町木谷 市子城跡など

原爆資料保存研究会

と き 11月16日(木) 14:30～
と ころ 市役所北館 市民協働センター

11月の図書室開放

と き 11月17日(金) 13:00～15:00
と ころ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース 第591号

令和5年(2023)11月5日発行
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男 TEL(082)423-7235

E-mail:akataatu@d4.dion.ne.jp

事務局長 國松宏史 TEL090-7979-6234

E-mail:kunimatsu402@hi3.enjoy.ne.jp

会報編集 間瀬 忍 TEL080-5756-2303

E-mail:mase shinobu@yahoo.co.jp